

2022

新春鼎談企画Ⅰ

熊本大学×熊本大学病院×熊本県医師会

コロナ禍で問われる、地域の医力――

先進の医学×連携の医療

# 熊本 医の新時代

2021年――世界が新型コロナウイルスに明け暮れた激動の一年だった。ウイルスは変異を繰り返し、猛威となつて、感染の波をもたらした。人の流れと経済の動きが止まり、私たちの暮らしは一変した。だが、そんな未曾有の災禍にあつても、熊本の医療は機能した。特定機能病院である熊本大学病院を中心に、地域の医療機関が連携し、県民の健康と安心安全を支えた。近代医学の先駆地として発展し、先進の地域医療を実現してきた熊本の、医の底力が発揮された。2022年新春に当たり、熊本大学の小川久雄学長と熊本大学病院の馬場秀夫病院長、そして熊本県医師会の福田稠会長による鼎談の機会を設け、朝日新聞熊本総局長の島田耕作が、熊本の医学と医療について聞いた。

## 世界に猛威を振るつた新型コロナウイルス 大打撃の一方で社会の良い変化も

――2021年を振り返っていただけますか？  
特に印象に残ったことがあれば教えてください。

**小川** 一昨年から続いています。新型コロナウイルスは患者さんの受療行動に変化があり、受診控えなどから、がんなどの診断や治療が遅れたケースも出ました。一方で、多くの方が、医学の進歩の速さを実感したと思います。診断法としてPCRが登場し、ワクチンが短期で作られて活用されました。

**馬場** 新型コロナウイルスを経験して、社会が一変したように思います。多くの人に、リモートでの勤務形態が定着しました。人の往来が制限され、経済には大きなダメージがありました。医療の分野で

は患者さんの受療行動に変化があり、受診控えなどから、がんなどの診断や治療が遅れたケースも出ました。一方で、多くの方が、医学の進歩の速さを実感したと思います。診断法としてPCRが登場し、ワクチンが短期で作られて活用されました。

**福田** 印象に残つたのは、コロナへの対応です。第3波に始まり、第4波、第5波と次々に感染の波が襲ってきました。都心部では医療崩壊が起こり、世界一とも言われる日本の医療がどうしたんだ、という声も聞かれました。国内だけを想定したなか、未知なる外敵が入ってきた。想定外で、即座の対応に苦労しましたが、ポテンシャルがあるから何とか持ちこたえ、体制を組み直すうちに対応できるようになっていきました。今は第6波にどう備えるかです。

## 被災の経験から学び得たノウハウ 県民の安全安心を守る熊本の医療

――全国でコロナウイルスが蔓延して、医療崩壊の危機が叫ばれるなか、熊本県は体制が保たれていたと思います。6年前に起こつた熊本地震の経験が役立つのでしょうか？

**馬場** 被災の経験が現場で何かに活かされたかという点、県や市などの行政、医師会、医療機関、看護協会など、それぞれの連携が非常によく取れていたところだと思います。第5波では、患者さんが増えて、1日300人を超すような時期もありました。このときも最初の段階で、入院、宿泊療養施設利用、自宅待機と、患者さんの振り分けがうまくできました。病床の利用も、準備した内の60パーセントほどで対応でき、医療が崩壊に至ることはありませんでした。急場はどう対応するべきか、行政も医療現場も、一定レベルのノウハウを持つているように思います。

**福田** 日本ではワクチンの供給が遅れ、接種開始も遅れました。けれどもいざ始まると、すぐに高い接種率を上げることができました。特に熊本県はそうでした。地震の被災と感染症の拡大では、一概に対応を比較できないところもあります。



が、やはり地震や豪雨で連携の重要性を学び、連帯感を培ったことが迅速な対応につながつたのだと思います。もう一つは、熊本大学病院の活躍が大きかった。熊本県の中心となる最高峰で最先端の医療機関が、軽度な症状から広く目を配り、基幹病院を統率しました。感謝しています。

## ウィズコロナという生活の新基準 新展開の期待と懸念されるリスク

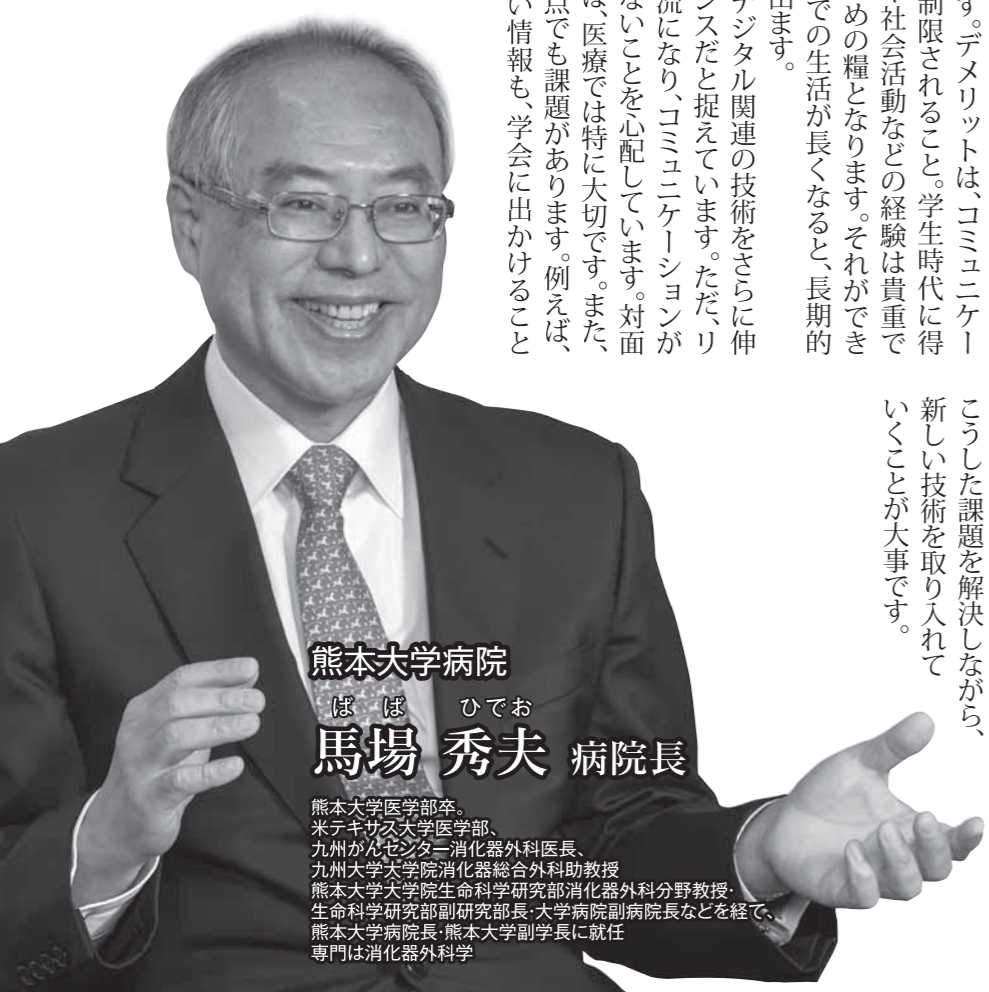
――いわゆるウィズコロナという考え方が、生活の中に浸透してきました。大学や病院での活動にも変化があると思います。この変化をどう受け止めていますか？

**馬場** 人と人の接触を避けるために、授業も会議もリモートで行うことが多くなりました。学会もリモートで開かれたりします。これにはメリットとデメリットがあります。メリットは、移動する時間や経費、労力を節約できること。海外の授業や会議にも、現地に出かけることなく、手軽に参加できます。デメリットは、コミュニケーションの機会が制限されること。学生時代に得る、クラブ活動や社会活動などの経験は貴重です。社会に出るための糧となります。それができずに、一人の世界での生活が長くなると、長期的な影響に不安が出ます。

**小川** AIやデジタル関連の技術をさらに伸ばしていくチャンスだと捉えています。ただ、リモート会議が主流になり、コミュニケーションが希薄になりかねないことを心配しています。対面によるやりとりは、医療では特に大切です。また、情報入手という点でも課題があります。例えば、まだ公にできない情報も、学会に出かけること

で、研究者から直に話を聞けたりします。最先端の貴重な情報のやりとりが難しくなっている点は危惧しています。

**福田** コロナによって、オンライン診療の導入が加速した面があります。多くのメリットがある一方で、デメリットもあります。特に、初診の患者さんをどうするか、ということ。臨床では、患者さんとの向き合い、医学的な知識を正しく提供することが求められます。最初からオンラインで診るのは、大変難しい。こうした課題を解決しながら、新しい技術を取り入れていくことが大事です。



熊本大学病院 馬場秀夫 病院長

熊本大学医学部卒。米テキサス大学医学部、九州がんセンター消化器外科医長、九州大学大学院消化器総合外科助教授、熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科分野教授、生命科学研究部副研究部長、大学病院副院長などを経て、熊本大学病院長・熊本大学副学長に就任。専門は消化器外科学。



熊本大学 おがわひさお 小川久雄 学長

熊本大学医学部卒。1984年より31年に渡り、同大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。国立循環器病研究センター理事長などを経て、2021年、第14代熊本大学学長に就任。専門は循環器疾患全般、多施設共同臨床研究。